

# 非規範的構文と概念空間の予備的考察<sup>1</sup>

眞野 美穂

神戸大学文化科学研究科

## 1. はじめに

言語には様々な構文がお互い関係を持ちながら存在しているため、一つの構文を理解するためには必然的に他の関係する構文との比較が必要になる。しかし、これまでに多くの研究がなされてきた他動詞文や自動詞文のような関係ですら、未だに説明されていない部分は多い。本稿は、特に非規範的構文 (non-canonical construction) とそれに関わる構文との関係の解明を目指し、非規範的格フレームを取り、状態を表す現代日本語の「与格主語構文 (dative subject construction)」・「二重主格構文 (double nominative construction)」に焦点を当て、分析を行う。そして、Croft (2001) の提案する Radical Construction Grammar の枠組みに基づき概念空間の考察を行うことで、構文間の関係の把握を目指す。

本稿が「非規範的構文」として対象とする構文は、以下のような構文である。

- (1) a. 健に/が真理がうらやましい (こと)
- b. 健が真理が好きな (こと)
- c. 健が頭が大きい (こと)

(1a)のような構文は「与格主語構文」、(1b)や(1c)は「二重主格構文」・「二重主語構文」などと呼ばれ、それぞれ「与格/主格 主格」・「主格 主格」という格フレームを持つ。これらは、対格言語における規範的な他動詞文の格フレームである「主格 対格」、そして自動詞文の「主格」とは異なる格フレームを持ち、限られた場合にしか生じない有標な格フレームである。二重主格構文には、尾上・木村・西村 (1998) で「第一種二重主語構文」と呼ばれる(1b)のような構文と(1c)のように名詞句が「全体 部分」またはそれと類似した関係で捉えられる「第二種二重主語構文」と呼ばれる構文が含まれる。本稿では「第一種二重主語構文」と与格主語構文に焦点を絞って分析を行う。「第二種二重主語構文」に関しては、名詞句と述部との関係の違いに加え、参与者(所有者)の前景化の過程などが関与すると考えられるため、稿を改めて論じる<sup>2</sup>。

これらの構文では、文頭に現われ主に「場 (domain)<sup>3</sup>」を表す与格/主格名詞句が主語特性を示すことが、これまでの研究で指摘されている。このような構文を本稿ではShibatani (2000, 2001) の用語に従い、「非規範的構文」と呼ぶ。かなり形式化の進んだ自動詞文や他

動詞文とは異なり、非規範的構文ではいくつかの異なる統語的振る舞いが観察される。格の交替現象が観察されるものや、対応する自動詞文や他動詞文を持つものも多く観察されることから、意味的、語用論的要因に影響を受ける構文であると考えられる。しかし、これまでの研究では非規範的構文とその他の構文との関係や位置づけに関しては、統一した見解は見られず、意味的・語用論的要因や揺れなどを考慮に入れた研究も不足している。また、類型的な観点から非規範的構文を見た場合、その共通点や相違点を捉える枠組みが未だ十分に議論されていないという点も問題としてあげられる。

本稿はこれらの点に関して、非規範的構文の概念空間における位置づけを考察する。Croft (2001) は、構文のような形式を各言語に固有のものであると考え、同時に言語に普遍的な概念空間を提案する。そして、言語間の差異は概念空間上にどのように形式が位置づけられるか、という点での違いによって生じると考える。意味的なレベルとしての概念空間を仮定することで、非規範的構文に観察される統語的な揺れや対応する自他構文との関係や語用論的要因を含めた上で、非規範的構文を全体的に把握できる点で有益であると考えられる。本稿では「時間的持続性」と「参加者の卓立性」のパラメーターという2つの一般的なパラメーターからなる概念空間を提案し、観察される差異からそれぞれの非規範的構文を概念空間上に位置づけ、他の規範的構文との関係についても議論を行う。また、先行研究で非規範的構文の意味特性としてあげられてきた「制御不可能性・非意図性・状態性」が非規範的構文の生起を予測できないことを指摘し、意味役割などの点から議論を行うことで、非規範的構文成立のためには2つの参加者が卓立している状態を表すことが必要であること、そして述語の品詞や経験の想定の有無が関わることを指摘する。

まず、第2節では非規範的構文に関わる先行研究の問題点を指摘し、仮説として概念空間を提案する。そして、第3節では第2節であげた概念空間に関わるパラメーターについて意味役割に注目して議論を行い、非規範的構文とその自動詞用法の間に働く操作についても検討する。第4節では第3節での議論に基づき日本語の非規範的構文を概念空間上に位置づけ、非規範的構文の範囲を明確化し、第5節ではまとめと今後の課題を示す。

## 2. 問題提起と仮説

### 2.1. 非規範的構文の特性

非規範的構文は、南アジアの諸言語 (Verma and Mohanan 1990) やヨーロッパの言語などを含む様々な言語で観察される構文である (Klaiman 1981, Aikhenvald et al. eds. 2001)。Shibatani and Pardeshi (2001) は類型的に見て、非規範的構文が生じやすい意味タイプとして(2)をあげている。

- (2) a. Possession, existence (Shibatani and Pardeshi 2001)  
 b. Psychological states  
 c. Physiological states  
 d. Visual / auditory perceptions, including the notion of appearance / seeming  
 e. Modal states of necessity and wanting, including the notion of obligation ('must')  
 f. Modal states of potentiality, including ability and the notion of permission ('may')

非規範的構文に共通する意味的な特性としては、「状態性 (三上 1953/1972, Kuno 1973)」、「非意図性 (Klaiman 1981, 角田 1990)」、「制御不可能性 (Jerkey 1999, Shibatani 2000, 2001)」などの特性がこれまでの研究で指摘されてきた。非規範的構文を取る述語には、可能形 *-(r)eru* (「見える・聞こえる」も含む) や願望形 *-tai* などの派生形も含まれるが、他の様々な要因 (派生に関わる統語構造の変化や述語の問題) が影響することから、本稿では派生形は対象から外し、議論を行う。Kuno (1973) は日本語で非規範的構文として現われる述語を網羅的にあげているが、そこから派生形を除き、意味タイプごとに並べ替えたものを(3)に示す。

(3) 日本語の非規範的構文を取る述語

- a. 心理状態: 面白い(A), 恐ろしい(A), 楽しい(A), ありがたい(A), 恥ずかしい, かわいい(A), ねたましい(A), うらやましい(A), 憎い(A), 欲しい(A), 好きだ(AN), 嫌いだ(AN), 残念だ(AN)  
 b. 所有: ある(V), いる(V), ない(A), 多い(A), 少ない(A)  
 c. 能力/可能: できる(V), 分かる(V), 拙い(A), 難しい(A), 可能だ(AN), 困難だ(AN), 容易だ(AN), 苦手だ(AN), 得意だ(AN), 下手だ(AN), 上手だ(AN)  
 d. 必要性: 必要だ(AN), 要る(V)

これらは(2)にあげた類型的に非規範的構文の現れやすい述語の意味タイプと重なっており、制御不可能で非意図的な状態を示している。

非規範的構文では、主語特性 (Keenan 1976) のうちコード化特性 (coding properties) は第二項の主格名詞句が担い、第一項が行動特性 (behavioral properties) を示すという状況が様々な言語で指摘されてきた (Verma and Mohanan 1990, Aikhenvald et al. eds. 2001)。日本語では、格標識で第二項 (二重主格構文の場合は両方の名詞句) が主格を取ることから、主語のコード化特性を担っていると言える。行動特性に関しては、第一項が(4)のように尊敬語化の対象となり、さらに(5)のように再帰代名詞を支配することからも、主語の行動特性を担う。さらに、Kishimoto (2004) は第二項が、「ノコト」がつけられるかどうか、などの点で目的語の行動特性を担っていることを指摘している。

- (4) a. 山田先生にはこの本が必要でいらっしやる。  
 b. 山田先生は花子がお好きだ。
- (5) a. 健<sub>i</sub>には花子<sub>j</sub>が自分<sub>i/\*j</sub>の妹よりも必要だ。  
 b. 健<sub>i</sub>は花子<sub>j</sub>が自分<sub>i/\*j</sub>の妹よりも好きだ。

## 2.2. 問題提起

2.2.節では、これまでの非規範的構文の分析の問題点を、状態文の分析における問題を含めて指摘したい。まず一点目として、非規範的構文の意味特性の問題をあげる。非規範的構文の意味特性として、先行研究ではその「制御不可能性・非意図性・状態性」などが指摘されてきた。しかし、非意図的で制御不可能な出来事や状態を示していても、他動詞文の格フレームが保持されている(6a)や(7a)のような例が存在している点は問題である。制御可能性は命令文にできるかどうか、そして意図性は「わざと」などの主語の意図性を示す副詞が入るかどうかなどの現象から確認される。

- (6) a. 健はうっかり財布を落とした。                      b. \*財布をうっかり落とせ！  
 (7) a. 健はお腹を壊した。                                      b. ??健はわざとお腹を壊した。  
       c. \*お腹を壊せ！    d. お腹を壊すな！

つまり、これらの意味特性は非規範的構文成立のための必要十分条件とは言えず、その生起を予測できない。さらに注目すべき点は、非規範的構文だけではなく状態文は全般的に「非意図的で制御不可能な状態」を表す点である。つまり、これらの意味特性は非規範的構文だけでなく状態文全体の特性と言える。一項を要求する自動詞状態文であっても、述語の品詞に関わらず制御不可能で非意図的な状態を表すことが、(8)や(9)から確認される。

- (8) a. 健は賢い。    b. \*健はわざと賢い。  
 (9) a. 健は変わっている。                                        b. \*健はわざと変わっている。  
       c. \*変わっている！

このことから、なぜ(2)のような意味タイプの述語に非規範的構文が観察されるのか、言語ごとに異なる非規範的構文の範囲がどのように類型化できるのか、という問題についてはこれらの意味特性だけでは説明できず、未だ十分な解答はなされていないと言えよう。

二点目の問題点として、他動性の分析に関する問題点を指摘する。これは一点目の問題点の背景となる問題である。これまでの研究では、他動詞と自動詞は一次的に連続しているものとして捉えられる傾向があった。そして、その連続性を把握するために他動性の度合いや他動詞のプロトタイプに関する研究がなされてきた。まず他動性に関する重要な研究として、Hopper and Thompson (1980) をあげたい。Hopper and Thompson (1980) は(10)

のような10のパラメーターを提案し、他動性をこれらのパラメーターの値から決定される、度合いを持ち、連続的なものであると捉えた。これらの他動性のパラメーターは文全体の意味なども含め、広く他動性を把握するものである。

(10) 他動性のパラメーター		Hopper and Thompson (1980:252)
	HIGH	Low
PARTICIPANT	2 or more participants, A and O.	1 participant
KINESIS	action	non-action
ASPECT	telic	atelic
PUNCTUALITY	punctual	non-punctual
VOLITIONALITY	volitional	non-volitional
AFFIRMATION	affirmative	negative
MODE	realis	irrealis
AGENCY	A high in potency	A low in potency
AFFECTEDNESS OF O	O totally affected	O not affected
INDIVIDUATION OF O	O highly individuated	O non-individuated

Tsunoda (1985) は、Hopper and Thompson (1980) の提案する10のパラメーターはそれぞれ独立したのではなく、中には相関関係を持つものもあり、いくつかの下位分類できることを指摘している。本稿も同様にパラメーター間の関係を見るが、分類の基準が少し異なる。非規範的構文の位置づけを探るため、特に「出来事 状態」の対立に着目し、上記のパラメーターの中には出来事にのみ関わるパラメーター（状態文では一定の値を取るもの）もあれば、出来事と状態どちらにも関わるパラメーターも存在することを指摘する。出来事に関連するパラメーターとしては、動作性 (kinesis), 相 (aspect), 瞬時性 (punctuality), 意図性 (volitionality), 動作主性 (agency), 受影性 (affectedness of O) があげられる。これらは、状態文では常に [Low] の値を取る。他動性のプロトタイプに関する先行研究は、これらの出来事にのみ関連するパラメーターを問題としており<sup>4</sup>、このことからパラメーターの値の偏りが示唆される。また、出来事と状態に共に関わるパラメーターも存在している。参与者 (participant) と叙法 (mode), 肯定 (affirmation), 個性性 (individuation of O) のパラメーターである（ただし個性性に関しては、本稿では目的語の個性性だけでなく対象の個性性も含め、拡大解釈する）。以上のようなパラメーターの値の分布状況を、HIGHの値を取る場合を [+], LOWの値を [-], そしてどちらも可能である場合を [±] として、(表1) にまとめる。

(表1) 出来事と状態の他動性のパラメーター

	Event	State
KINESIS	±	- (Non-action)
ASPECT	±	- (Atelic)
PUNCTUALITY	±	- (Non-punctual)
VOLITIONALITY	±	- (Non-volitional)
AGENCY	±	- (A low in potency)
AFFECTEDNESS OF O	±	- (O not affected)
INDIVIDUATION OF O	±	±
PARTICIPANT	±	±
MODE	±	±
AFFIRMATION	±	±

他動性のパラメーターを考察した場合、その値において他動詞文のプロトタイプからもっとも離れていると考えられる文は、自動詞文の中でも対象の属性などを表す自動詞状態文であろう。しかし、これまでの研究において自他の対立として盛んに議論されてきたのは、出来事を表す自動詞文と出来事を表す他動詞文における対立であった。なぜなら両者の間には自他交替・使役化などの様々な統語現象が観察されるためである。他動性に関する議論の多くは、自他の対立を出来事中心の観点から捉えており、非規範的構文を含む状態文に関しては未だ明確な位置づけはなされていない。

これまでの日本語の非規範的構文に関する先行研究には、非規範的構文を自動詞文として捉える立場 (三上 1953/1970, Shibatani 2000, 2001, Shibatani and Pardeshi 2001)、他動詞文として捉える立場 (Kuno 1973, 竹沢・Whitman 1998, Onishi 2001, Kishimoto 2004)、そして自動詞文と他動詞文の中間に位置づける立場 (角田 1991)、という大きく分けて3つの立場が存在している。しかし、どの立場を取るにしろ、(11)のような非規範的構文が(12)のような意図的な動作を表す自動詞文や、(13)のような非意図的な出来事を表す自動詞文より、他動性が高い、もしくは低いと単純には言うことができない点は問題である。(表2)にそれぞれの文の他動性のパラメーターの値をまとめる。つまり、他動性からの非規範的構文の位置づけは困難であるといえる。

- (11) a. 健は花子が好きだった。                      b. 健には白髪がある。  
(12) 健は走った。  
(13) 健は死んだ。

(表2) 他動性のパラメーターの値

	(11a)	(11b)	(12)	(13)
KINESIS	-	-	+	+
ASPECT	-	-	-	+
PUNCTUALITY	-	-	-	+
VOLITIONALITY	-	-	+	-
AGENCY	-	-	+	-
AFFECTEDNESS OF O	-	-		
INDIVIDUATION OF O	+	-		
PARTICIPANT	+	+	-	-
MODE	+	+	+	+
AFFIRMATION	+	+	+	+
total number of [ + ]	4	3	5	5

このことから、状態と出来事の把握における非対称性の問題を議論する必要がある。Tsunoda (1999) は、他動詞文のプロトタイプに関する研究は多いが、自動詞文のプロトタイプを求める研究は少ない点を指摘している。Tsunoda (1999) はさらに自動詞文と他動詞文が一次元的に捉えられない可能性、そして自動詞文の種類の高さを指摘する。つまり、非規範的構文の把握にはその特性や他の構文との関係をさらに詳細に考察する必要があり、本稿では状態を表す非規範的構文と自動詞状態文の関係、そしてこれら状態文と出来事を表す文との関係の把握を目指す。

### 2.3. 仮説

本稿は先にあげた2つの問題、1) 非規範的構文の意味特性に関する問題、2) 非規範的構文の位置づけに関する問題、に対して2つのパラメーターからなる概念空間からの把握を提案する。一つは卓立した参与者に関わるパラメーターであり、もう一つは時間的持続性のパラメーターである。卓立した参与者というのは、それぞれの出来事や状態において、中心的な役割を果たす参与者のことであり、典型的他動詞文では動作主と対象が、そして自動詞状態文では対象がその認知の中心としての卓立した参与者である。時間的持続性というのは、それぞれの構文が時間的持続性の低い出来事、例えば瞬間的に完結する出来事を示すのか、それとも時間的持続性の高い状態を表すのか、というパラメーターである。これらのパラメーターから(図1)のような概念空間を提案する。

(図1) 非規範的構文に関わる概念空間

	時間的持続性	LOW	Time Stability	HIGH
	卓立した参加者の数	Event		State
	2	Transitive event		Non-canonical construction
	1	Intransitive event		Intransitive state

この概念空間の縦軸は卓立した参加者の数を表し、横軸は時間的持続性（大きくは、出来事状態）の対立を表し、それぞれの対立を連続的なものとする。 (図1) にはそれぞれの構文の位置づけを示してあるが、この位置づけに関する議論は次節以降で行う。また、(図1) にマッピングされるのは、述語ではなく構文全体であり、文全体の意味や表現機能を考慮した上でマッピングは行われる。これにより、益岡 (1989) が文の機能により区別する事象叙述文と属性叙述文の差異なども概念空間上に反映することができる。このような概念空間では、Croft (2001) の主張するように、言語間の差異が形式の位置づけにおける差異として捉えられるため、言語間での非規範的構文の範囲の違いを明示的に捉えることになる。次節以降で日本語の非規範的構文の具体例をあげ、その位置づけに関して分析を行う。

### 3. 参加者の卓立性

第3節では参加者の卓立性に関わるパラメーターについて考察を行い、どのような意味や概念がこれらの構文の統語構造に関わっているのかという点、そして関連する他の構文との共通点と相違点について議論を行う。

#### 3.1. 意味役割

非規範的構文の第一項の意味役割には様々なものがあるため (尾上・木村・西村 1998)、意味役割で非規範的構文を規定することは難しいとこれまでの研究で指摘されてきた。ここでは、参加者の卓立性や事態の制御可能性の概念に関係するものとして、名詞句の意味役割を議論する。非規範的構文に現われる第二項の意味役割についてはすべて広い意味での「対象」であるため議論は行わず、以下では第一項について考察する。

日本語の非規範的構文の第一項の意味役割は大きく分けて、心理状態を直接表すもの (以下「感情」)、所有や能力の所有を表すもの (「所有」)、そして必要性・難易などの判断を表すもの (「判断」)、という3つに分けられる。例文を(14)にあげ、それぞれの構文の第一項の意味役割とそれを取る述語を(15)にあげる。

- (14) a. 私はプレゼントが欲しい。(感情)  
 b. 健には子供がいる。(所有)  
 c. 健には英語が難しい。(判断)
- (15) a. 経験者: 面白い, 恐ろしい, 楽しい, ありがたい, 恥ずかしい, かわいい, ねたましい, うらやましい, 憎い, 欲しい, 好きだ, 嫌いだ, 残念だ  
 b. 所有者: ある, ない, いる, 多い, 少ない, できる, 分かる, 下手だ, 拙い, 上手だ, 苦手だ, 得意だ  
 c. 判断主: 難しい, 可能だ, 困難だ, 容易だ, 必要だ, 要る, 簡単だ

経験者と所有者・判断主は、経験の想定の有無で区別される。感情表現では、経験者がその感情を経験していると話者が想定しているため、(16a)が意味的に許容されにくいのに対して、所有や判断を表す文では、所有者・判断主がその状態を経験しているとは想定されておらず、単に話者による判断を表現する文となっていることが、次の(17)が許容される文となっていることから分かる<sup>5</sup>。これが構文とは関係なく意味的に生じるものであることは、(16b)のような対応する他動詞文においても同様の現象が観察されることから分かる。

- (16) a. ??健自身がどう思っているかは知らないが、健は真理が嫌いだった/憎かった。  
 b. ??健自身がどう思っているかは知らないが、健は真理を嫌っている/憎んでいる。
- (17) a. 健自身がどう思っているかは知らないが、健(に)は英語ができる/分かる。  
 b. 健自身がどう思っているかは知らないが、健(に)はこの本が必要だ/要る。  
 c. 健自身がどう思っているかは知らないが、健(に)は孫が多い/いる。

また、所有者は複合格助詞「ニトツテ」との交替現象において、他とは異なる振る舞いを示す。所有者を表す与格は(18)のように「ニトツテ」と交替することはできないが、判断主や一部の経験者では、(19), (20)のように交替が可能である。

- (18) a. \*健にとって英語が上手な/うまい/できる/分かる (こと)  
 b. \*健にとって子供がいる/多い/いない (こと)
- (19) a. 健にとって花子が必要な (こと)  
 b. 健にとって英語が難しい/簡単な (こと)
- (20) 健にとってその行為がありがたかった/恐ろしかった/面白かった/残念だった (こと)

この判断主を表す「ニトツテ」名詞句は、非規範的構文だけではなく、(21b)のように判断を表す自動詞状態文にも生じることができる。ここでの判断主は(22b)のように主語特性を示しておらず、任意に現われる付加詞である。一方、(21a)のような非規範的構文では、与格名詞句が「ニトツテ」のような斜格と交替した場合であっても、(22b)のように主語特性



- (25) a. \*山田先生はいらっしゃる。  
 b. \*英語は上手だ。  
 c. \*田中先生はお好きだ/お嫌いだ。  
 d. \*山田先生は必要でいらっしゃる/お要りになる。
- (26) a. 山田先生は面白くていらっしゃる/楽しくていらっしゃる。 (対象)  
 b. 山田先生は楽しくていらっしゃった/恥ずかしくていらっしゃったようだ。(経験主)

これらの自動詞文は意味的な観点から属性表現と感情表現に分けられる。(24)や(26a)の文は、主語である対象の属性を表す自動詞状態文だが、自動詞文の中には経験者を主語として取り、寺村(1982)が「感情の直接表出」と呼ぶ(27)のような文や(26b)のような感情を表す文も含まれている。前者が属性表現であり、後者が感情表現である。心理状態を表す述語の場合、人間を表す名詞句が主語として現われると、(28a)のように感情表現と対象の属性表現両方の解釈が可能となる。一方、それ以外の述語では、(29)のように対象の属性を示す解釈のみが許容され、主語が判断主であるという解釈は許容されない。

- (27) (私は)怖い。
- (28) a. 山田さんは面白かった/恐かったようだ。 (経験者の感情・対象の属性)  
 b. この映画は面白い/怖いようだ。 (対象の属性・\*経験者の感情)
- (29) a. 山田さんは難しいようだ。 (対象の属性・\*判断主の属性)  
 b. この本は難しいようだ。 (対象の属性・\*判断主の属性)

このことは、経験者が判断主に比べ、参与者の中でも卓立したものとして捉えることができることを示している。言い換えると、面白いと判断しているからといって「健は面白い」とは言えないことから、判断主はそれが何らかの判断を持つものとして状態の中心として把握できないといえる。

この非規範的構文と対応する自動詞文の関係に、出来事を表す動詞述語文での自他交替と興味深い共通点が存在する。出来事における自他交替に関しては様々な研究があるが、その立場は大きく分けて3つ存在している。自動詞を基本と考える立場、他動詞を基本と考える立場、そして語彙によって両方が存在すると考える立場である。影山(2001)は両方が存在するとし、他動詞文を自動詞文へ変化させる操作として、「反使役化」と「脱使役化」を区別する<sup>6</sup>。反使役化では、変化対象が自ら変化するもの(内在的コントロール)と捉えられるのに対して、脱使役化では、動作主を不特定の人として伏せることにより自動詞文が得られることになる。また、反使役化では動作主は変化対象自体であるのに対して、脱使役化では意味的に不特定の動作主が含意される。本稿は、(30)、(31)のような非規範的構



両方にまたがっているのに対して、心理状態を表す述語の品詞は形容(動)詞のみである<sup>8</sup>。これは単なる偶然なのであろうか。非規範的構文と対応する他動詞文の存在の有無を比較すると、この問題がさらに明確になる。Kachru (1990)<sup>9</sup>, Shibatani and Pardeshi (2001) は、非規範的構文が対応する規範的構文を持つ傾向があることを指摘しているが、日本語で非規範的構文と他動詞文の対応関係を見た場合、語彙的に対応する他動詞文を持つ非規範的構文は限られており、心理状態を表す(34)のような述語に限定される<sup>10</sup>。

(34) 楽しい/楽しむ、ねたましい/ねたむ、うらやましい/うらやむ、憎い/憎む、好きだ/好く<sup>11</sup>、嫌いだ/嫌う、欲しい/欲する

- (35) a. 健は映画を楽しんでいる/嫌っている。  
b. 健は花子をうらやんでいる/ねたんでいる/憎んでいる。

これらの述語では類似した感情を、非規範的構文もしくは他動詞文で表すことが可能であり、述語の品詞が格フレームの選択に重要な役割を果たしていると言える。(36a), (37a)のように非規範的な格フレームを取るのは形容(動)詞述語であり、対応する動詞述語は(36b), (37b)のように他動詞文の格フレームを取る。

- (36) a. 健が真理が/?を嫌いな (こと) (形容動詞)  
b. 健が真理を/\*が嫌っている (こと)<sup>12</sup> (動詞)  
(37) a. 健に/が真理が/?を憎い (こと) (形容詞)  
b. 健が真理を/\*が憎んでいる (こと) (動詞)

この場合、先行研究 (Jarkey 1999, Shibatani 2000, 2001, Shibatani and Pardeshi 2001, Onishi 2001) でも指摘されているように、(38)のように他動詞構文では制御可能な事態解釈が表現され、非規範的構文では(39)のように制御不可能な事態解釈が表現される。

- (38) a. 健はわざと真理を嫌った/憎んだ/うらやんだ。  
b. 真理を嫌うな/憎むな/うらやむな。  
(39) \*健はわざと真理が嫌いだった/憎かった/うらやましかった。

一方、他の述語ではこのように語彙的に対応する他動詞文は存在しておらず、派生形や他の語彙によって表される<sup>13</sup>。そして、述語の品詞が動詞であろうと形容(動)詞であろうと「与格/主格 主格」という非規範的な格フレームが現れることが(40)から分かる。

- (40) a. 健に/がこの本が/\*を{必要な/簡単な} (こと) (形容動詞)  
b. 健に/がこの本が/\*を{要る/分かる} (こと) (動詞)

c. 健に/が子供が/\*をいる (こと)

(動詞)

所有に関しては「持つ」という他動詞が対応するように思えるが、必ずしも同じ内容を表せるわけではないことが角田 (1991) や澤田 (2003) で示されており、注意が必要である。

非規範的構文の中でも経験者を取るものは、語彙的に対応する他動詞をもつ点、そして非規範的構文として表れる場合の述語の品詞が必ず形容(動)詞であるという点で、その他の所有や判断を表す文とは異なっていた。この感情表現とその他の非規範的構文に観察される差異は、眞野 (2001) で主張したように、経験の想定の有無から説明が可能である。経験者・所有者・判断主を表す名詞句は、制御可能性、経験の想定の有無、そして人間かどうかという点において以下のような階層をなすものとして捉えられる。

(表3) 第一名詞句の意味役割の階層

	動作主	> 経験者	> 所有者・判断主	> 場所
Controllability:	[ + CON]	[ ± CON]	[ - CON]	[ - CON]
Experience:	[ + EXP]	[ + EXP]	[ - EXP]	[ - EXP]
NP hierarchy:	[ + HUM]	[ + HUM]	[ + HUM]	[ - HUM]

経験者と「所有者・判断主」の間の差は経験の想定の有無であり、「所有者・判断主」は経験の想定がない分、より場所に近い概念であると言える<sup>14</sup>。ここで重要な点は、経験が想定されていなければ制御可能な解釈ができない、という点である。自分が関与しない事態を制御することは困難であるため、制御可能な事態を表す他動詞文は存在しない。

品詞とそれが持つ機能の典型的な傾向についてはCroft (1991) が詳しいが、動詞には出来事を叙述する機能を持つ傾向があり、形容詞はものの属性を修飾する機能を持ちやすい。このことから、全体的に見た品詞間の状態性の階層は以下ようになる。

(41) 動詞 < 形容(動)詞 < 名詞

感情表現は経験者を項として取るため、制御可能な事態と制御不可能な事態共に想定が可能であった。よって、この場合には述語の品詞の違いで事態認知の違いを表すと考えられ、動詞は制御可能な状態を表し、より状態的な形容(動)詞は制御不可能な状態を表す。一方、経験が想定されない所有者・判断主を項として取る場合は制御可能な事態が想定されないため、(42)のように述語の品詞が動詞であっても、制御不可能な状態を表す非規範的構文として生じることになる。

(42) a. \*健にはわざと英会話ができる/難しい/要る/必要だ。

b. \*英語ができるな/要るな。

また、格フレームと制御可能性の議論で確認すべき点はもう一点ある。派生形を除き、感情表現にのみ観察される対格との交替現象についてである。Klaiman (1981) は与格主語構文が意図性を持たない構文であることをいくつかのテストから指摘し、意図的な文脈では他動詞的な格フレームが生じることを指摘し、Jarkey (1999) も非規範的構文の中でも他動性が高いと解釈される意図性のあるものや派生形が交替を許しやすいことを指摘している。述語の意味タイプ別に見ると、日本語ではこの交替現象は(43)のように感情表現の一部に限って許容され、それ以外の述語では(44)のような可能の派生形<sup>15</sup>を除き、許容されない。さらに、(43)のように形容(動)詞述語のまま他動詞の格フレームを取った場合は、もとの非規範的構文と同様に制御不可能な事態を表していることが(46)から分かる。

- (43) a. 私が水が/を{欲しい/飲みたい} (こと)  
 b. 私が健が/を{好きな/嫌いな} (こと)  
 c. 私が健が/?を{憎い/うらやましい/ねたましい} (こと)
- (44) 私が英語が/を話せる (こと)
- (45) a. 私が子供が/\*を{いる/ない/多い} (こと)  
 b. 私がこの本が/\*を{要る/必要な} (こと)  
 c. 私が英語が/\*を{分かる/難しい/できる/上手な} (こと)
- (46) \*健は無理やり/わざと花子を{好きだった/嫌いだった/憎かった}。

さらに、これら対格との交替を許す述語は先にあげた自動詞用法を許さない感情表現、つまり2つの参加者が常に卓立している感情表現とほぼ重なっている。これらの述語が二重主格の格フレームを取っていることも2つの参加者の卓立性を支持している。

第3節では感情表現内部での差異、そして意味役割に関わる非規範的構文内部での参加者の卓立性に関する階層性を示した。2つの参加者が常に前景化されるものとそうでないもの、そして意味役割の面でも参加者の卓立性は異なる。

#### 4. 非規範的構文の位置づけ

第4節では、もう1つのパラメーターである時間的持続性について議論を行い、第3節で行った参加者の卓立性のパラメーターと共に、(図1)で仮定した概念空間上にそれぞれの構文を位置づける。

##### 4.1. 時間的持続性

時間的持続性の観点から見ると、Givon (1984) が論じるように、感情表現は一時的な状態も表せるため、所有や判断より時間的持続性は低いと考えられる。これは、感情表現が時間的限定を加える「一瞬」のような副詞との共起が自然であることから裏付けられる。

- (47) a. ?私には一瞬子供がかわいかった。      b. 私には一瞬犬が怖かった。  
 (48) a. \*私には一瞬家があった。                b. ??私には一瞬英語が上手だった。

所有と判断の時間的持続性に関しては、どちらも時間的持続性にはっきりとした差異は見られず、名詞句の違いなどによっても時間的持続性に揺れが観察されたのであるが、本稿では全体として感情表現よりも時間的持続性が高い点に着目し、詳細な議論は行わない。

また、この時間的持続性は表現タイプによっても左右される。特に心理状態が自動詞文として表された場合、経験者の感情を表現する場合もあれば、対象の属性を表す場合もある。この場合、前者では非規範的構文の感情表現と同様に一時的状態を表しており、時間的持続性は低いのに対して、後者は判断を表す文と同様に属性を表すため時間的持続性は比較的高い<sup>16</sup>。つまり、この時間的持続性のパラメータは、述語だけで決まるのではなく、文がどのような意味を表すかという機能によって左右されると考える。

#### 4.2. 非規範的構文と概念空間

第3節では、特に意味役割の観点から参加者の卓立性に関して議論を行った。それに加え、4.1.節では感情表現が所有や判断よりも時間的持続性が低く、出来事に近いと考えられることを示した。これらの議論から、日本語の非規範的構文の分布を概念空間に示すと、以下の(図2)のようになる。

(図2) 日本語の非規範的構文の範囲

時間的持続性 卓立した 参加者の数	LOW	Time Stability		HIGH
	Event			State
2		心理状態(V) NOM-ACC	心理状態 (A/ AN) NOM-NOM	所有 (所有・能力) DAT-NOM 判断(必要性)
			心理状態 (A/ AN) DAT-NOM	判断 DAT-NOM
1		NOM 自動詞状態文		

2つの参加者が卓立しており、一方を背景化することができない文（感情表現の一部と所有や必要性を表す文）は、上記の概念空間で上部に位置づけられる。また、時間的持続性の観点からは、より時間的持続性の高い状態や属性を表す所有や判断を表す非規範的構文は右側に、感情のように時間的持続性が低い構文は出来事に近いものとして概念空間上でその左側に位置づけられる。このような概念空間上の位置づけは、心理状態を制御可能なものとしてとらえた場合対応する他動詞文が生じるという第3節で論じたような交替現象を隣接するものとして矛盾なく把握することができる。また、非規範的構文から判断主や経験者、対象を不特定のものとして背景化することにより自動詞文が生じるという交替現象も矛盾なく把握できる。先に述べたように、この分布を考える際の単位は構文全体であり、そのため、自動詞用法として生じた自動詞文(感情・属性表現)は、感情を表す場合は心理状態の下の領域に、そして属性を表す場合は判断の下にそれぞれ位置づけられることになる。

このように概念空間において、日本語の非規範的構文が分布する範囲は上記のように右上を中心とした範囲に位置づけられることとなり、Croft (2001) の Radical Construction Grammar の枠組みで規定されているように、それぞれの構文が概念空間において連続的に分布するという原則を守った形で提示される。また、所有が概念空間上の角に位置づけられることになり、典型的に「所有」の意味で非規範的構文が生じやすいこととの相関関係が示唆される。このように概念空間を仮定することにより、非規範的構文に関わる意味的要因や語用論的要因を構文間の位置づけを明示的に反映させ、把握することが可能になる。さらに、二つの一般的なパラメーターを使用しているため、他言語の非規範的構文を同様に把握することが可能な点でも利点は多い。

## 5. 結論と今後の課題

本稿では、自他構文の把握における状態文の位置づけをあげ、(図1)のような概念空間を提案し、日本語の非規範的構文を(図2)のような範囲に位置づけた。この概念空間から、非規範的構文がどのように他の規範的構文と相関しているかが明示できる。また、これまで指摘されてきた「非意図性・非制御可能性・状態性」という意味特性は非規範的構文だけでなく状態文に共通する特性であることを指摘し、非規範的構文の生起には、それぞれの参加者の卓立性が重要であることを主張し、それにより非規範的構文の生起条件をより明示的に示した。また、非規範的構文とそれに関連する構文との関係について、そしてそこで観察される操作に関しても議論を行った。

概念空間を仮定することで、今後の課題も明らかになってきた。一点目は、典型的な観点からの非規範的構文の概念空間への位置づけである。本稿で提示した2つのパラメーターから、日本語では状態を表し2つの参加者が卓立している場合に非規範的構文が生じることが把握できる。しかし、他言語では非規範的構文の生起条件が異なることが以下の例からも予見される。ヘブライ語では(49)のように卓立した参加者が1つの場合であっても非

規範的構文が生じ、マラティー語では非意図的であれば状態ではなく出来事を表していても生じることが(50a)の例から分かる。このことから、他言語の非規範的構文をどのようにこの概念空間に位置づけるかは今後の課題である。

- (49) atsuv le-John. (Hebrew: Anne-Marie Hartenstein p.c.)  
 sad DAT-John  
 ‘John is sad.’
- (50) a. raam-laa (\*muddam) raDu aa-l-a. (Marathi: Prashant Pardeshi p.c.)  
 Ram-DATpurposely cry.N come-PF-N  
 Lit. ‘Cry came to Ram (\*purposely).’
- b. raam-Ø (muddam) raD-l-aa.  
 Ram.ERG..M purposely cry-PF-M  
 ‘Ram cried (purposely).’

二点目としては、概念空間において重要な位置を占める種々の自動詞文の分析があげられる。非規範的構文の自他に関する問題は、この自動詞文の分析と深く結びついた問題であり、理論的な観点からも非常に重要である。Perlmutter and Postal (1984) で議論された非対格性の観点からも、形容詞がすべて非対格自動詞であるのかどうか、という問題も議論する必要がある。今後はそれぞれの問題点について具体的に論じていきたいと思う。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、岸本秀樹先生、西光義弘先生、柴谷方良先生に様々なコメントやご指摘をいただいた。特に岸本先生には稿を重ねるごとに、詳細なコメントをいただいた。ここに深く感謝申し上げます。ただし、本稿の内容が筆者の責任に帰することは言うまでもない。

なお、本稿は平成15年度日本学術振興会特別研究員科学研究費補助金による研究成果の一部である。

## 注

1 本稿で使用する略号は以下のものである：A=adjective, ACC=accusative case, AN=adjectival noun, CON=control, DAT=dative case, ERG=ergative case, EXP=experience, GEN=genitive case, HUM=human, M=male, N=neutral, NOM=nominative case, PF=perfect, V=verb

2 関連する議論としては所有者外置構文があげられる。眞野 (2004a) を参照されたい。

3 尾上・西村 (1997) は「場」と呼び、Shibatani (2000, 2001) は“domain”と呼ぶが、両者の把握は類似している。

4 Jacobsen (1991) の他動詞のプロトタイプを( )に、そして、GivOn (1995) の他動的な事象の定義を( )にあげる。

( ) There are two entities involved in the event. (Jacobsen 1991: 29)

One of the entities (called the “agent”) acts intentionally.

The other entity (called the “object”) undergoes a change.

The change occurs in real time.

( ) Semantic definition of transitive event (GivOn 1995: 76)

**Agent:** The prototypical transitive clause involves a volitional, controlling, activity-initiating agent who is responsible for the event, thus its **salient cause**.

**Patient:** The prototypical transitive event involves a non-volitional, inactive non-controlling patient who registers the event’s change-of-state, thus its **salient effect**.

**Verbal modality:** The verb of the prototypical transitive clause codes an event that is perfective (non-durative), sequential (non-perfect) and realis (non-hypothetical). The prototype transitive event is thus fast-paced, completed, real, and perceptually-cognitively salient.

5 ただし、過去時制では所有者類が実際にそう感じているという経験を想定した解釈も可能になる。過去時制では感情表現の人称制限もなくなることから、より客観的な状況把握が想定されていると言える。

( ) a. 健にはこの本が必要だった。 (健自身がそう感じている解釈も可能)

b. 健には英語が分かった。 (健自身がそう感じている解釈も可能)

6 影山 (2001) は反使役化・脱使役化を以下のように表す。それぞれの例と共に( ), ( )にあげる。

( ) 反使役化

a. 障子を破る

b. 障子が破れる。

xの活動

yが変化

yの状態

x=y (つまり、y自体の活動によってyが変化状態になる)

( ) 脱使役化

a. 絵をかける。

b. 絵がかかる。

xの行為

yが変化

yの状態

(不特定の人としてふせる)

文では主語として現れる。

7 具体的にどのような意味操作を仮定すべきかについては、非規範的構文を含む種々の状態文の意味構造をどのようなものとして捉えるか、という大きな問題を含んでいるため、今後の課題としたい。

8 先行研究においては、寺村 (1982)、杉本 (1986)、山岡 (2000) などが述語の意味と品詞の関係を指摘している。しかし、その要因に関してはさらに検討の余地がある。

9 Kachru (1990) はその対応関係をStative, Change-of-State, Activeという三つで提示しているが、日本語においてはChange-of-stateにあたる構文は「 - (に)なる」だと考えられる。しかしこの構文では、述語が元来要求している非規範的な格フレームには変化はない。

- ( ) a. 健には真理が必要だった。                      b. 健には真理が必要になった。  
( ) a. 健が真理が好きだった。                      b. 健が真理が好きになった。

これは、状態変化の構造の中で状態を表す部分はそのまま保持され、「なる」という動詞が変化の意味を付与しているということの意味している。変化が含まれるため、出来事に近づくわけであるが、他動詞に近づいたわけではない点には注意が必要である。

10 ただし、日本語には( )のように、「がる」という派生形も存在しており、この派生形も( )のような他動詞の格フレームをとる。

- ( ) a. ありがたい/ありがたがる、楽しい/楽しがる、難しい/難しがる、得意だ/得意がる  
( ) b. 健はその本を面白がった/難しがった。

しかし、この「 - がる」が表す状態は、(38)であげたような語彙的な他動詞の対応形やもとの形容詞述語文と異なり、( )のように話者の感情を直接表現することができず、金水 (1989) の述べるように外部から観察可能な状況にあたるものを表しており、語彙的な派生形や対応する非規範的構文とは異なった意味を持っていると考えられるため、本稿ではこれを非規範的構文と対応する他動詞文としては扱わない。

- ( ) a. 真理/\*私はその本を面白がった。  
b. 真理/\*私はそのプレゼントをありがたがった。  
c. 真理/\*私は健をうらやましがっていた。

11 ただし、「好く」という動詞は現代日本語ではあまり使われない。

12 基本形は「嫌う」であるが、ここではa文の意味の状態性に近づけるために、「 - ている」の形をとっている。また、金水 (1989) は「悲しむ」を例にあげ、「悲しんだ」という形は経験者の心理状態を表すのに対し、「悲しんでいた」という形は外部から判断した状態を表すことを指摘している。

13 例としては「 - する」や「 - しようとする (Klaiman 1981)」という意図的な意味を表す文では他動詞構文が観察される。

- ( ) a. 先生は宿題を/\*が{多くした/難しくした/?必要にした}。  
b. 健は論文を/\*が分かるうとした。

14 所有類は場所と交替可能であることから支持される。

- ( ) a. 健はお金が必要だ。                      b. ここではお金が必要だ。                      c. お金は必要だ  
( ) a. 健には英語が簡単だ。                      b. ここでは英語が簡単だ。                      c. 英語は簡単だ  
( ) a. 健には子供がいる。                      b. ここには子供がいる。                      c. 子供がいる

15 ただし、属性表現の中には、時間的に位置づけることが難しい判断を表すものもあると考えられるが、この点に関しては項を改めて論じたい。

## 参考文献

- Aikhenvald, A.Y., R.M.W. Dixon, and M. Onishi (eds.) 2001. *Non-canonical Marking of Subjects and Objects*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins publishing company.
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Givon, Talmy. 1984. *Syntax*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing company.
- Givon, Talmy. 1995. *Functionalism and Grammar*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing company.
- Jacobsen, W.M. 1991. *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publisher.
- Jarkey, Nerida. 1999. Case marking of objects of stative predicates in Japanese. *Australian Journal of Linguistics*, 19-2, 197-224.
- Kachru, Yamuna. 1990. Experiencer and other oblique subjects in Hindi. In Verma and Mohanan (eds.), 59-75.
- 影山太郎(編). 2001. 『動詞の意味と構文』大修館書店.
- Keenan, E.L. 1976. Toward a universal definition of “subject”. In Li (ed.) *Subject and Topic*, 303-333. New York: Academic Press.
- 金水敏. 1989. 「「報告」についての覚え書き」 仁田義雄・益岡隆志(編) 『日本語のモダリティ』 121-129. くろしお出版.
- Kishimoto, Hideki. 2004. Transitivity of ergative case-marking predicates in Japanese. *Studies in Language*, Vol.38-1, 105-136.
- Klaiman, M.H. 1981. Toward a universal semantics of indirect subject constructions. *BLS*, Vol.7, 123-135.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press
- 眞野美穂. 2001. 「与格/二重主語構文について 日本語感情表現の分析から」 『第123回 日本言語学会予稿集』 日本言語学会.
- 眞野美穂. 2004a. 「所有関係と非規範的構文について」 影山太郎・岸本秀樹(編) 『日本語の分析と言語類型』 109-126. くろしお出版.
- 眞野美穂. 2004b. 「与格主語構文の構造について 「ニトッテ」との交替現象からの一考察?」 *Proceedings of KLS*, Vol.24, . 関西言語学会.
- 益岡隆志. 1989. 『命題の文法』 くろしお出版.
- 三上 章. 1953/1972. 『現代語法序説』 くろしお出版.
- Onishi, Masayuki. 2001. Non-canonically marked subjects and objects: Parameters and properties. In Aikhenvald, Dixon, and Onishi (eds.), 1-52.
- 尾上圭介・西村義樹. 1997. 「主語をめくって」 『月刊言語』 26巻11号, 82-95. 大修館書店.

- 尾上圭介・木村秀樹・西村義樹. 1998. 「二重主語とその周辺 日中英対象」『月刊言語』27巻11号, 90-108. 大修館書店
- Perlmutter, David and Paul Postal. 1984. The 1-advancement exclusiveness aw. In D. Perlmutter and C. Rosen (eds.) *Studies in Relational Grammar*2, 81-125. Chicago: University of Chicago Press.
- 澤田浩子. 2003. 「所有物の属性認識」『月刊言語』32巻11号, 54-60. 大修館書店.
- Shibatani, Masayoshi. 2000. Non-canonical constructions in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics*. No.2, 181-218. Department of Linguistics, Kobe University.
- Shibatani, Masayoshi. 2001. Non-canonical constructions in Japanese. In Aikhenvald, Dixon, and Onishi (eds.), 307-354.
- Shibatani, M. and P. Pardeshi. 2001. Dative subject constructions in South Asian languages. In P. Bhaskarrao & K.V. Subbarao (eds.) *The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics*, 311-347. New Delhi: Sage Publications.
- 杉本武. 1986. 「格助詞」奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』227-380. 日本語の凡人社.
- 竹沢幸一・John Whitman. 1998. 『格と語順と統語構造』研究社.
- 寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- Tsunoda, Tasaku. 1985. Remarks on transitivity. *Language*, Vol.21, 385-396.
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- Tsunoda, Tasaku. 1999. Transitivity and intransitivity. *Journal of Asian and African Studies*, 57, 1-32.
- Verma and Mohanan (eds.) 1990. *Experiencer Subjects in South Asian Languages*. Stanford, California: Center for the Study of Language and Information.
- 山岡政紀. 2000. 『日本語の述語と文機能』くろしお出版.